

# フレーベル『人間教育』の枠組み

——ペスタロッチ『母の書』、フレーベル『建白書』の枠組みとの比較——

甲斐規雄

## はじめに

この研究は昭和63年から基礎資料作りを手掛けてきたものであるが、岩崎次男氏が「建白書に見られる、ペスタロッチの『母の書』に基づく幼児教育思想の発端から、主著『人間教育』の発刊、そして幼稚園の創立を経て、晩年の媒介学校の構想に至る……一貫した思想の流れ」<sup>(1)</sup>を1996年論文にまとめておられる。

F.フレーベル『人間教育』(1826)の構想について、J.H.ペスタロッチ『母の書』(1803)との関連、<sup>(2)</sup>フレーベル『ペスタロッチに関する報告』(1809、以下『建白書』)との関連<sup>(3)</sup>で研究を進めてきたが、両論文の原稿枚数の都合でこの三著書の枠組みの比較資料を公刊できずにきた。

『建白書』と『人間教育』の完訳は既にあるが、『母の書』についてはペスタロッチの単独執筆ではないため長田新編『ペスタロッチ全集』にも収められておらず、完訳はない。完訳した上での作業ではないため、厳密さに欠けるところもあると思われるが、『人間教育』構想の研究の基礎資料であるためここに整理しておきたい。

## 1. 『母の書』、『ペスタロッチに関する報告』そして『人間教育』の枠組み対照表

この枠組み対照表は次の状況下で作成した。なお、この全ての著書の初版には見出しが付いていないため『母の書』と『建白書』については内容により見出しを付し、『人間教育』については、W.ランゲの分類に従った。また『母の書』と『建白書』について、明確に分類し得ないが『人間教育』構想の基調となっていると思われる部分については原文を抄出することにした。

(1)ペスタロッチ(57歳)の『母の書』は、ペスタロッチが自ら書いた序文と第7番目の練習、そして算数の主任教師クリュジー H.Krüsie が書いた第一から第六までの練習から構成されている。しかし、この『母の書』はペスタロッチの単独執筆ではないためか、コッタ版の全集には収められておらず、E.シュブランガーの批判版には第1から第6の練習が項目のみ、序文、第7番目は全文収められている。しかし、初版本にある図は省かれている。この一連の研究は、ペスタロッチとフレーベルとの思想的関連を中心としたものであるため、シュブランガーの編集意図に基づいて対照表を作成した。

(2)一般にフレーベル(27歳)の『シュヴァルツブルク・ルードルシュタット侯国への建白書』という場合、1809年4月1～27日/1809年5月1日/1810年5月16日/1810年6月13日付の4回の書簡を指すが、本論文の場合『母の書』、『人間教育』との関係を検討するのが趣旨であることから、1809年4月1～27日の『建白書』に限って整理した。

(3)フレーベル(44歳)の『人間教育』の枠組については初版本には見出しがなく、1行から2行分の行間のある部分そして内容との関連でみると497ページの本文を390に区切ることができた。それをランゲは、フレーベルの定期刊行物『教育的家族』Wochenschrift

Die erziehenden Familien”の論文構成に依拠して、1862年7月21日の改訂版で104のパラグラフに分類している。<sup>(4)</sup>しかし、H.ハイラント、H.チンメルマン、E.ホフマンは、総数105のパラグラフとしているが、ランゲの原典に従い104の分類に従った。<sup>(5)</sup>

## 2. 『母の書』の枠組み

人間の中に誕生と同時に内在する性向 Anlagen を理性的で、落ち着いた存在にまでもたらず最初の発達は、自然、永遠の創造者、つまり神の手にあると『母の書』の「まえがき」は、説き起こしている。そしてその神慮を提示した『母の書』をペスタロッチは、他でもない母の手に委ねたいと述べている。何故なら、愛情の芽と洞察の芽は母親の情感、思いやりの中に一つになっているからである。これを「神がそれらを一つにするものを、母よ！神はあなたの中に、あなたを通してあなた方の子どもたちの中でそれらを一つにする」と述べ、人間の本质はその存在自体から出発しなければならないとして、この『母の書』を先ず人間の身体の練習のための手引きにしたいとしている。

その後を引き継いでクリュジーは、第一から第六の練習について述べている。第一の練習は、身体(Leib), 肉体(Körper), 頭(Kopf,Haupt), 顔, 両側頭部, 前頭部, 後頭部, 頭髪, 額, 目, 眉(両眉), 脛(両脛), 左右両足の小指の関節, 左右両足の大・中・小指の爪, 皮膚の存在について述べる。

第二の練習は、第一の身体各部の位置を …liegen über(oben,vorne,unter, außen)…という文章形式で説明する。

第三の練習は、同様に身体各部の関係を…ist ein Theil…という部分を説明する形式をとる。

第四の練習は、その身体各部の従属関係を…hat ein(zwei vier,sechs,acht, zehn, zwanzig,vierundzwanzig,achtundzwanzig)…という目的語の前に数詞を付すという形式で説明している。ここでは、腕・指と関節, 胴体と肋骨の身体各部が加えられている。

第五の練習は、身体各部の様子と現象、例えば頭は丸い、額は堅くてアーチ状等という説明をする。

第六の練習は、身体各部の総合的な特徴と状態、例えば身体各部は丸く、ふっくらしている、臍、犬歯、歯の根は尖っているという説明をしている。

その上でペスタロッチ自らが再度筆を取り、第一から第六の実行について第七の練習として述べていく。頭の実行、額の実行、目の実行、鼻の実行、口の実行、歯の実行、舌の実行、耳の実行を母親が自分の子どもに適切に指導できるように説明されている。例えば、口の実行について、食べる、飲む、事柄を告げる(reden), 言葉を話す(sprechen), 言う、歌う、口笛を吹く等がそれである。その中でも特に言葉を話すことについて、更に打ち合わせる(absprechen), 話しかける(ansprechen), 発音する(aussprechen), 話し合う(besprechen), 朗読する(vorsprechen), 復唱する(nachsprechen), 言葉をかける(zusprechen)と具体的な指導方法を示している。

## 3. 『ペスタロッチに関する報告』の枠組み

『建白書』の「まえがき」では、人間を肉体 Körper, 精神 Geist そして魂 Seele の結合した神の被造物としてとらえる。従って人間の使命は、その三つの力を調和的に均整をとりながら一つの全一体 Totalität として形成することである。そのためには、自然の法則

に基づいて人間の感覚に基礎づけられた法則に基づくことが要求される。

一方子どもは、父母の愛の結晶という条件付けがなされている。従って子どもは父母の愛によって教育されなければならない。

### ①幼児期の人間

子どもは微笑み（魂の発現）そして見る（精神の顕現）という感覚が発達してくる。ここでその性向を育成、形成する方法と指導を父母に委ねる。その手引きが『母の書』である。子どもは母親の出掛ける所はどこへでもついて行き、身近にあるもの、生活圏内の全てを注意深く観察する。ペスタロッチは、この『母の書』の副題を「あるいは、子どもに観察したり話したりすることを教える母親たちの入門書」としている。そのため言語発達の時期が到来する頃には、子どもを取り巻くあらゆるものの対象の個々の区別、違いを認識している。その時には、対象物の名を呼ばねばならないことを子どもは既に知っている。

そして子どもの観察は、音、動き、姿、形、光沢、組み合わせ、数えること等の子どもの自らの世界の拡大へと移行している。子どもは一人で数時間もの間、拾い、収集し、整理し、調査することに没頭する。このようにして七年間の狭義の意味の教育が母を通して行なわれ、必然的に家庭における教師の役割を持つ父親、あるいはその代理人である教師にその指導は委ねられる。

### ②学齢期の人間

言葉について、第一の教授科目「意味との関連における母国語」（個々の単語・表現の意味、複数の単語・表現の意味）、第二の教授科目「言語の形式的部分の表示」（自分自身、外界のものを言葉で報告する）を挙げ、子どもの言葉による描写の対象を自然と事物に整理している。

それが第三の教授科目「自然描写」、第四の教授科目「工芸品描写」そして、第五の教授科目「地表描写」（自然地理学、政治地理学そして物理地理学へと発展させる）である。

その上であらゆる対象に共通する教授科目として、第六の教授科目「数の学習」、第七の教授科目「形の学習」そして第八の教授科目「不変量の学習」を独立させている。

また、子どもの魂の形成に至る人間の本質の純粋な表現である唱歌について第九の教授科目「教授としての唱歌」を取り上げ、更に魂の表現芸術によるものとして第十の教授科目「図画」を取りあげている。

### ③結び

第一から第十までの教授科目が音による言葉であるとして、記号による言葉、つまり「読み方の教授」と「書き方の教授」を簡単に付け加えている。

その上で、以上のペスタロッチの教育法、教授法が、あらゆる身分の人間に適するものであること、学校におけるこの方法の実施、六歳以下の子どもたちの合自然な教育と取扱いのため民衆の中の母親たちや両親たちに、ペスタロッチ方式を実施する可能性そしてペスタロッチの基礎教授と専門の学問的教授との関連について述べ、この『建白書』を結んでいる。

### おわりに

テーマが壮大であるため、基礎資料作りに年月を要した。明星大学所蔵の初版『母の書』にフレーベル直筆の書込みがあるが、そのフレーベルの意図を下敷きにして『母の書』、『建白書』そして『人間教育』を読み比べてみると、そこには一貫した枠組み、思想が見られ

る。

この考察の視点を(1)『人間教育』総論のプラトンの教育観, (2)乳幼児期の人間 (①見出しのない『人間教育』, ②衝動のとらえ方, ③教と形は家族の領域で), (3)学齢期の人間(①母の手による指導と教師の指導, ②自然や外界から学ぶ), (4)母性喚起のための教育, (5)基礎教授と人間教育に置いてみた。『人間教育』総論のプラトンの教育観についての研究は、既にプロティノスとの関連で進めてきた。<sup>(6)</sup>

それ以外の視点についての考察は、まだ緒についたばかりのように思う。しかし、その研究の延長線上に、フレーベルが何故『人間教育』の執筆を断念したのか、必ず見えてくるようにも思う。

#### 注

- (1) 岩崎次男「フレーベルにおける幼児教育思想の発展—建白書(1809年)と『人間教育(1826年)』に重点をおいて—」(埼玉大学紀要<教育科学II>第45巻第1号)1996
- (2) 拙著「フレーベル建議書『ハインリッヒ・ペスタロッチについて』の周辺—『母の書』書込みを手掛かりに—」(明星大学教育学研究紀要第11号)1997. 3
- (3) 拙著「フレーベル『人間教育』の構想—ペスタロッチ『母の書』を始点にして—」(日本ペスタロッチー・フレーベル学会『人間教育の探究』第10号)1998. 5 発刊予定
- (4) Dr. Wichard Lange(hrsg.), Ideen Friedrich Fröbels über Die Menschenerziehung und Aus-  
sage verschiedenen Inhalts, Berlin, 1863. Verlag von Th. Chr. Fr. Enslin. V - VII. Erika  
Hoffmann(hrsg.), Fröbel Ausgewählte Schriften, Menschenerziehung (Pädagogische Texte,  
herausgegeben von Wilhelm Flitner, Verlag Helmut Küpper Vormal's Georg Bondi) 1961.  
S.255-276ff.
- (5) F. Seidel はパラグラフに拠らず章節に分類(F. Seidel(hrsg.) Friedrich Fröbel's Menschen-  
erziehung, Erziehungs-, Unterrichts- und Lehrkunst. Verlag von A. Pichler's Witwe & Sohn,  
Buchhandlung für pädagogische Literatur und Lehr-mittel Anstalt.) H.  
Zimmermann(hrsg.) Fröbel's Menschenerziehung, mit einer Beilage ("Grundzüge der Mens-  
chenerziehung") Verlag von K. F. Koehler, 1913. Reclam 文庫(1926)にはパラグラフなし。E.  
Hoffmann(hrsg.) Pädagogische Texte (hrsg. W. Filter) Friedrich Fröbel Ausgewählte  
Schriften Zweiter Band, Die Menschenerziehung, Verlag Helmut Küpper Vormal's Georg  
Bondi. 1961, H. ハイラント『フレーベル入門』(小笠原道雄, 藤川信夫訳) 玉川大学出版部  
1991. 124ページ
- (6) 拙著「新人文主義への回帰」1987(明星大学教育学研究紀要第2号), 「フレーベルの教育史的  
位置の再考」1992(同第7号), 「プロティノスの二つの世界」1993(同第8号), 「フレーベル  
におけるプロティノス的なもの」1995(同第10号), 「フレーベルの形而上学的発達観」1996(同  
第11号), 「フレーベルの神秘主義—プロティノスの発出・還帰との関連で」1994(日本ペスタ  
ロッチー・フレーベル学会紀要第7号)
- (7) 対照表中, ペスタロッチ『母の書』(初版本)の in Commission bey Heinrich Geßner とフ  
レーベル『人間教育』(初版本)の in Commission bey A. Wienbrack は, いずれも Kommission  
が Commission となっている。この Kommission は15世紀使用されるようになったが, 1800  
年代でも本文中混在している場合もあり, 特に表紙, 扉等にはドイツ文字 (Fraktur) で印刷  
する際 Commission の使用がよくみられる。

## 『母の書』, 『建白書』, 『人間教育』 枠組み対照表

<p>Pestalozzi's Elementar = Bücher, Buch der Mütter oder Anleitung für Mütter ihre Kinder bemerken und reden zu lehren, 1803.</p> <p>(1) Erster Heft. Zürich und Bern. in Commission bey Heinrich Geßner, Buchhändler, und in Tübingen. in der T.G.Cotta'schen Buchhandlung.</p> <p>(2) Pestalozzi's Sämtliche Werke 15. Band, Schriften aus den Jahren 1803-1804 bearbeitet von Emanuel Dejung und Walter Klauser (Kritische Ausgabe begründet von Artur Buchenau, Eduard Spranger, Hans Stettbacher 15. Band) Orell Füssli Verlag, Zürich, 1958 (1)の頁: (2)の頁)</p>	<p>Friedrich Froebel über Heinrich Pestalozzi, Yverdun, 1.-27. April 1809. An die Fürstin Regentin in Schwarzburg = Rudolstadt.</p> <p>(1) Friedrich Fröbel's gesammelte Pädagogische Schriften. I. Bd. Aus Fröbel's Leben und erstem Streben. Autobiographie und kleine Schriften. Herausgegeben von Dr. Wichard Lange. Berlin, 1863 Verlag von Th. Chr. Fr. Enslin. (頁)</p>	<p>Friedrich Fröbel, Die Menschenerziehung, die Erziehung =, Unterrichts = und Lehrkunst, 1826.</p> <p>(1) angestrebt in der allgemeinen deutschen Erziehungsanstalt zu Keilhau; dargestellt von dem Stifter, Begründer und Vorsteher derselben, Friedrich Wilhelm August Fröbel. Erster Band. Bis zum begonnenen Knabenalter. Keilhau 1826. Verlag der allgemeinen deutschen Erziehungsanstalt. Leipzig. in Commission bey A. Wienbrack.</p> <p>(2) Friedrich Fröbel's gesammelte pädagogische Schriften. Die Menschenerziehung und Aussätze verschiedenen Inhalts. Herausgegeben von Dr. Wichard Lange, nebst drei lithographirten Tafeln. Berlin 1863. Verlag von Th. Chr. Fr. Enslin. (§番号)</p>
<p>Vorrede (5-14:347-352)</p> <p>Die Nature hat die ersten Entwicklungen der Anlagen des Menschen... die zum Bemerkten und Reden an die erste Sorgfalt der Mütter für ihr Kind ... die das Kind sieht und hört, sondern selbst, indem es sich selbst fühlt, ... alles Wissen des Menschen von ihm selbst ausgehe und auskehren müsse, ich befolge ihn und fasse in dieser Anleitung den menschlichen Körper in zehn Übungen ...</p> <p>Erste Übungen ... die lehrt, ihrem Kinde die äußern Theile seines Körpers zu zeigen und zu benennen ... ins Auge zu fassen</p> <p>zweyte Übungen ... zeigt sie ihm die Lage eines jeden dieser Theile</p> <p>dritte Übungen ... auf den Zusammenhang der Theile seines Körpers aufmerksam</p> <p>fünfte Übungen ... die wesentlichsten Eigenschaften eines jeden Theils seines Körpers bemerken und benennen</p> <p>sechste Übungen ... diejenigen Theile des Körperes, ... jetzt bekannten Eigenschaften mit einander gemein</p>	<p>(1) Pestalozzi's Grundsätze der Erziehung und des Unterrichts und dessen davon ausgehende Anweisungen und Mittel zur Ausübung derselben gründen sich gang auf die Art und Weise, wie der Mensch als Geschöpf erscheint. ...</p> <p>Der Mensch ... ist ein Verein von drei Hauptkräften: Körper, Seele, Geist; diese harmonisch und zu einem Ganzen gleichmäßig auszubilden, ist seine Bestimmung als Erscheinung.</p> <p>Er geht ... durch die Gesamtheit seiner Anlagen und nach seiner Bestimmung ist. ...</p> <p>Er entwickelte den Menschen, wirkte auf den Menschen in der Totalität seiner Anlagen. ...</p> <p>Er hat daher den Menschen ... ein unzertrenntes und unzertrennbares Ganze ist, ... als Ganzes im Auge. ...</p> <p>Er ... nach den Gesetzen der Natur und nach denen, die im Sinn des Menschen gegründet sind,</p> <p>(2) Er erscheint bedingt, bedingt</p>	<p>I Begründung des Ganzen. (1-23)</p> <p>* In allem ruht, wirkt und herrscht ein ewiges Gesetz: ... Diesem allwaltenden Gesetze liegt ... ewig seiende Einheit zum Grunde ... Diese Einheit ist Gott. (1)</p> <p>* Erziehung des Menschen ist Das Anregen, die Behandlung des Menschen zur reinen unverletzten Darstellung des innern Gesetzes, des Göttlichen mit Bewußtsein und Selbstbestimmung und die Vorführung von Weg und Mittel dazu (2)</p> <p>* ... von dem bewußten, denkenden, vernehmenden Wesen bezogen auf die Darstellung und Ausübung durch und an sich, ist sie Erziehungswissenschaft. ... Der Zweck der Erziehung ist Darstellung eines berufenen, einen, unverletzten und darum heiligen Lebens. (3)</p> <p>* Das Göttliche also in dem Menschen, sein Wesen muß durch die Erziehung in demselben entwickelt, dargestellt, zum Bewußtsein ... Das Göttliche, Geistige, Ewige, welches in der den Menschen umgebenden Natur ist, das Wesen der Natur</p>

haben,zusammensuchen ... gehörend  
gemeinsam benennen  
siebente Übungen...das Kind bemer-  
ken und sich ausdrücken,wie und  
bey was für Gelegenheiten diese Ver-  
richtungen

achte Übungen ... was zur Besor-  
gung seines Körpers gehöt und

nothwendig ist,aufmerksam

neunte Übungen ... macht ... am  
Faden der bekannten Eigenschaften  
der Theile des Körpers auf den viel-  
seitigen Nutzen...lehrt es sich bes-  
timmt darüber ausdrücken

zehnte Übungen...lehrt sie das Kind  
alles das, was es in allen neun Übun-  
gen über Theil seines Körpers bes-  
timmt bemerken und benennen

...werde ich ungesäumt fortfahren,  
die wesentlichsten Gegenstände, die  
dem Kinde am nächsten liegen, und  
zur Entwicklung, Stärkung und  
Belebung der Kräfte seines Bemer-  
kens und Redens... Die ersten Keime  
der Liebe und die ersten Keime der  
Einsicht ... vereinigen sich im  
Muttergefühle und in den instink-  
tätigen und darum allgemeinen  
Folgen dieses Gefühls ... was Gott in  
euch und durch euch in euren Kin-  
dern also zusammengefügt hat, das  
soll der Mensch nicht scheiden... ist  
das Buch der Mütter gar nicht als  
ein Lehrbuch anzusehen, welches in  
die Hände der Kinder gehört...

Menschlicher Körper [im Auszug]

Erste Übung (1-20:353-354)

Körper oder Leib, Kopf oder  
Haupt, Angesicht, Scheitel, Stirne,  
Augen, Augenbraunen, Augen-  
lieder, Nägel, Haut

Zweyte Übung (21-43:354-355)

A (Der Scheitel) liegt C (oben) dem  
B (Kopfe).

A (Angesicht, Augen, Augen-  
braunen, Knochel...)

B (Kopf, Stirn, Augenlieder, Stirn,  
Gelenk...)

C (oben, vorne, unter, über, außen  
...): Dritte Übung (44-50:355)

A (Der Kopf) ist Theil B (des Kör-  
pers).

A (Angesicht, Augenbraunen,

durch Vater und Mutter und durch  
das diese beide Bindende und  
Vereinigende, durch die Liebe.

So wird der Mensch Kind, d.h. Inbe-  
griff der Vater = und Mutterliebe.

(154-156)

ausmacht und sich bleibend in ihr  
ausspricht, muß die Erziehung, der  
Unterricht dem Menschen zur An-  
schauung bringen und ihn erkennend  
machen... Das Hervorgegangen-, das  
Bedingtsein des Menschen und der  
Natur aus Gott, das Ruhen des Men-  
schen und der Natur in Gott soll die

Erziehung in ihrer Gesamtheit durch Erziehung, Unterricht, Lehre in dem  
Menschen zum Bewußtsein erheben und im Leben wirksam machen. (5)

\* ... von der Mannigfaltigkeit in der Natur auf die Einheit ihres letzten  
Grundes, Gottes, und von der Einheit Gottes auf die in Ewigkeit fortgehende  
Mannigfaltigkeit der Naturentwickelungen geschlossen werden. (6)

\* Deshalb sollen Erziehung, Unterricht und Lehre ursprünglich und in ihren  
ersten Grundzügen nothwendig leidend, nachgehend (nur behütend, schüt-  
zend), nicht vorschreibend, bestimmend, ein greifend ein. (7)

\* das Wirken des Göttlichen ist in seiner Ungestortheit nothwendig gut,  
muß gut, kann gar nicht anders als gut sein. ... doch wirken in beiden Kräfte  
welche aus einer Quelle geflossen und nach gleichem Gesetze tätig sind ...  
die eine Fortentwicklung, die sichere stetige Fortschreitung des Men-  
schengeschlechtes, das ist die Darstellung des Göen im Menschen mit Frei-  
heit und Selbstbestimmung (8)

\* Alle wahre Erziehung, Lehre und Unterricht, der echte Erzieher, Lehrer  
muß ... zugleich doppelendig, doppelseitig sein. ... zwischen beide ... willkür-  
los aus sich aussprechende Beste, Rechte walten, ein Drittes ... das ruhige  
heitere Hingeben an das Walten dieses Dritten ... (13)

\* die Menschheit im Menschen ... fortgehend werdendes, sich Entwickeln-  
des, ewig Lebendiges ... fortschreitend betrachtet werden. (16)

\* im Menschen ... aus dem Göttlichen, aus Gott, dunkel ahnend frühe bewu-  
ßt, ... die Ahnung ... muß früh in dem Menschen gepflegt, gestärkt, genährt  
später zum bewußtsein erhoben, geläutert werden. (21)

Der Mensch in seiner Erscheinung  
als Kind. (156-174)

(1) Sprach (163)

das Kind mit Bestimmtheit äußere  
Eindrücke, z.B. die des Lichtes und  
der Dunkelheit, ausnimmt. Die  
Mutter muß das Kind schon ge-  
lehrt haben, alles zu bemerken, alles  
zu unterscheiden was sich im  
Kreise seines Lebens befindet, ehe  
noch der Zeitpunkt der eigentli-  
chen Sprachentwicklung herbei-  
gekommen ist. Ich kenne so behan-  
delte Kinder, die lange noch nicht  
sprachen, ungefähr 1<sup>1/2</sup> Jahr alt  
waren, und alles unterscheiden  
konnten, was sie zunächst, die alles  
erkannten und sogar gang deutli-

II Der Mensch in der Periode  
seiner frühesten Kindheit (24-44)

\* aus ihrem Nichts in neblichter  
gestaltloser Dunkelheit, in chaoti-  
scher Verworrenheit, selbst Kind und  
Außenwelt in einander verschwin-  
nend entgegen, es stellen sich dann  
die Gegenstände demselben aus  
diesem

Nichts, diesem Nebel, besonders,  
durch das von Seiten der Eltern (24)

\* in dem Kinde zuerst der Gehör-  
sinn, das Gehör, und erst von ... gere-  
izt, später der Gesichtssinn, das Gesi-  
cht ... dem Worte, und dann dem  
Zeigen (26)

\* Mit der fortschreitenden Sin-  
nenentwicklung entwickelt sich an

Hals, Genick, Nacken, Nagel)  
 B(Kopf, Angesicht, Hals, Nacken, Zehen)

Vierste Übung (51-57:356-357)  
 A(Der Leib) hat C(einen)  
 B(Kopf). A(Körper, Kinnbacken, Zehen, Arme, Fuß, Finger, Rumpf)  
 B(Gliedmaß, Augenzahne, Gelenke, Zehen, Nagel, Rippen)  
 C(zwey, vier, sechs, acht, zehn, zwanzig, vierundzwanzig, achtundzwanzig)

Fünfte Übung (58-62:357)  
 A(Der Kopf) ist B(rundlich).  
 A(Stirn, Augenhohlen, Hals, Kopf, Rumpf, Zehen)  
 B(beweglich, bewachsen, unbehaart, hart, glatt, lange, gewölbt)

Sechste Übung (63-66:357-358)  
 Theile des Körpers...rund sind...  
 Ganz und sind die Augäpfel, die Augenringe und die Augensterne  
 ...lang sind Haare; rundlich ist der Kopf, der Hals und der Rumpf  
 ... Ganz spitzig sind die Augenwimpern; zugespitzt aber nicht ganz spitzig sind die Kronen der Augenzähne und die Wurzeln der Zähne.

Siebente Übung (67-164:359-424)  
 die wesentlichsten Verrichtungen der Theile des menschlichen Körpers...

Verrichtungen des Kopfes (359-360)  
 den Kopf schütteln (359)  
 Mit dem Kopfe winken (359)  
 Auf dem Kopfe tragen (359-360)

Verrichtungen der Stirne (360)  
 runzeln, entrunzeln

Verrichtungen der Augen (360-373)  
 Mit den Augen sehen (360-372)  
 ...er sieht Himmel und Erde, es sieht den Garten vor den Hause, es sieht Bäume, Häuser, Menschen und Tiere; es sieht in die Nähe und in die Ferne, es sieht Großes und Kleines, es sieht Einzelnes und Vieles, es sieht Weißes, Blaues und Rothes und Schwarzes... Das Mittel, zu diesem höchsten Lebensgenuß zu gelangen, ist deine erste Pflicht. Besorge dein Kind! Ich zitterte und schämte mich vor der Menschennatur, ... Liebe dein Kind! Versäume es

che Begriffe davon zu haben schienen. Ist das Kind so behandelt worden, so hat es dann, wenn es sprechen lernt, den sehr wesentlichen Nutzen und Vortheil, daß es schon die Gegenstände, welche es benennen soll, kennt ...

Das Buch der Mütter gab zuerst Anleitung, das Kind bemerken zu lehren - Sprache ist das Medium der Mittheilung. ...

Das Kind zu diesem vollkommen bewußten Erkennen seiner Außenwelt zu erheben, dies soll bis dahin das Streben der Mutter sein. Das herrliche Reich der Natur öffnet sich jetzt nach und nach dem Kinde; es tritt, geleitet an der Hand der Mutter, in dieselbe ein. Die Natur wird jetzt seine Welt; das Kind schafft die Natur zu seiner Welt.

Jetzt erhält das Kind feste Punkte, waram es seine Freude anknüpfen kann: an den Ton, an die Bewegung, die Gestalt, die Form, die Blätter, an die Verbindung und hundert andere, theils bestimmbare, theils bloß empfindbare Eigenschaften;

(2) Ton(Ohre) (166)  
 (3) Zählbarkeit (168)  
 (4) Form (171)

Der Mensch als Schüler(Lehrling) (174)

Erster Unterrichtsgegenstand wird daher die Muttersprache in Bezug auf ihre Bedeutung. (174)

Zweiter Unterrichtsgegenstand wird dahernun die Darstellung des formellen Theils der Sprache. (177)

Dritter Unterrichtsgegenstand: Naturbeschreibung. (183)

Vierter Unterrichtsgegenstand: Kunstprodukten = Beschreibung. (184)

Fünfter Unterrichtsgegenstand: Beschreibung der Erdoberfläche. (185)

Zweiter Kursus des Geographischen Unterrichts.

Sechster Unterrichtsgegenstand: Kenntniß der Zahl. (190)

Siebenter Unterrichts = Gegenstand: (192)

dem Kinde gleichzeitig und gleichmäßig der Gebrauch des Körpers der Glieder (27)

\* Mit der entwickelten Sinnen-, Körper- und Gliedertätigkeit, wo das Kind nun anfängt, Innerliches selbsttätig äußerlich dazustellen, hört die Säuglingsstufe der Menschenentwicklung auf ... Mit der eintretenden Sprache beginnt Äußerung und Darstellung des Innern des Menschen ... es bricht sich das Innere des Menschen und strebt, sich äußerlich kund zu tun, zu verkündigen (28)

\* Dies zeigt besonders das Spiel und Spielen der Kinder in dieser Zeit und Epoche; gern und, wenn es kann, viel spricht das Kind beim Spiel. Spiel und Sprechen ist das Element, in welchem das Kind jetzt lebt (29)

\* Spielen, Spiel ist die höchste Stufe der Kindesentwicklung, der Menschenentwicklung diese Zeit ... es ist freitätige Darstellung des Innern ...

Die Spiele dieses Alters sind die Herzblätter des Ganzen künftigen Lebens (30)

\* Ohne alle Lehre, ohne alle Aufforderung, ohne alles Lernen tut dies die natürliche Mutter von und aus sich selbst (33)

\* Es ist nicht möglich, daß uns vor irgend einer Seite her höhere Freude, höherer Genuß komme als von der Führung unserer Kinder, von dem Leben mit unseren Kindern, davon, daß wir unsern Kindern leben (40)

\* Darum eilen wir! lassen wir uns, unsern Kindern, lassen wir durch sie unserer Sprache Gehalt und den uns umgebenden Gegenständen Leben (41)

geben. ... Laßt uns unsern Kindern leben (42)

III Der Mensch als Knabe. (45-55)

\* die Knabenstufe ... die Stufe des lerners ... ist Erziehung; die bezeichnete Stufe der Knabenzeit nimmt so den Menschen vorwaltend in einzelnen Beziehungen und für Einzelnes in Anspruch, um später ihre innere Einheit abzuleiten. (45)

\* sie führen zur Gemüts- und Her-

nicht; Gottes ob ihm waltende Vorsehung fängt mit ihrem Unterrichte von dem Augenblicke an, wo das Kind seine Augen öffnet; deine Mitwirkung zu Gottes Unterricht komme nicht später!

Mit den Augen winken (372)  
 Mit den Augen zielen (373)  
 Mit den Augen schielen (373)  
 Mit den Augen weinen, Thränen vergießen (373)

Verrichtungen der Nase (373-374)  
 riechen und athmen

Verrichtungen des Mundes (375-408)  
 öffnen und schließen

Mit dem Munde essen (375-379)  
 Mit dem Munde trinken (379-381)

Mit dem Munde reden (381-404)  
 ... anreden, ausreden, bereden, überreden, unterreden, wiederreden, zureden ... sprechen, absprechen, ansprechen, aussprechen, besprechen, versprechen, nachsprechen, widersprechen, zusprechen ... sagen, absagen, ansagen, aufsagen, aussagen, untersagen, zusagen, schwatzen

Mit dem Munde singen (404-407)  
 ... absingen, besingen, vorsingen, nachsingen,

Mit dem Munde pfeifen (407-408)  
 Mit dem Munde jauchzen (408)

Verrichtungen der Zähne (408-410)  
 Mit den Zähnen beißen (408-410)  
 ... abbeißen, aufbeißen, ausbeißen Mit dem Munde kauen (410)

Verrichtungen der Zunge (410)  
 Mit der Zunge schmecken (410)

Verrichtungen der Ohren (411-424)  
 Töne, die die Menschen hervorbringen (411-417)  
 ... schreien, lallen, reden, lachen, fluchen, schmatzen, husten, nießen, gähnen, mit den Fingern schnellen, mit den Füßen stampfen, treten, Töne, die von vierfüßigen Thieren herkommen (417)

Töne, die man von Vögeln hört (417)

Töne, die die Insekten hervorbringen (417-418)

Formenlehre.  
 Achter Unterrichtsgegenstand: (193)  
 Lehre von den stetigen Größen.  
 Neunter Unterrichts = Gegenstand: (196)  
 Gesang als Unterricht.  
 Zehnter Unterrichts = Gegenstand: (197)  
 das Zeichnen.  
 Tonsprache Leseunterricht. Lese = Methode (199)  
 Schreibunterricht (200)  
 Über die Einführung dieser Methode in den Schulen (202)  
 kinder-Klasse (206)  
 die untere Schüler = Klasse  
 die höhere Schüler = Klasse  
 Über die Möglichkeit der Einführung der Pestalozzischen Methode unter den Müttern und Eltern im Volk zur naturgemäßen Erziehung und Behandlung ihrer Kinder bis zum sechsten Jahre. (209)  
 Über den Zusammenhang des Pestalozzischen Elementar = Unterrichts mit dem höheren wissenschaftlichen Unterricht. (212)  
 Sprach  
 Naturbeschreibung  
 Naturgeschichte  
 Erdoberflächenbeschreibung  
 Beschreibung der Menschen  
 Zahlenlehre  
 Größenlehre  
 Mathematik der stetigen Größen  
 Naturlehre  
 Kunstprodukten = beschreibung  
 Elementar = Zeichnen  
 Formenlehre  
 Berührung  
 Gesang  
 Kunst

So ließe sich nach Pestalozzi das Ganze durchführen, bis alle diese Wissenschaften, ... wie sie von demselben ausgingen. ... so setzt die Pestalozzische Methode den Menschen in seine bis ins Unendliche fortgehende Entwicklung und Ausbildung, in sein an keine Zeit und keinen Raum gebundenes Erkennen, nirgends eine Ganze, nir-

zensbildung, und aus ihr geht in dem Knaben Gutes- und Willens-tätigkeit hervor (46)

\* Um die natürliche Willens-tätigkeit des Knaben zur wahren, echten Willensfestigkeit zu erheben müssen alle Tätigkeiten des Knaben, aller Wille desselben von der Entwicklung, Ausbildung und Darstellung des Innern ausgehen und sich darauf zurück beziehen (47)

\* das ist in dem Knaben jetzt Tätigkeitstrieb hat sich in dem Knaben zum Bildungs- Gestaltungstrieb entwickelt, und hierin löst sich das ganze äußere Leben, die äußere Erscheinung des Knabenlebens dieser Zeit auf. ... ist das Zweck des Spieles ein bestimmtes sich bewußtes Ziel, so ist er jetzt die Darstellung als solche, das Darzustellende selbst ... der Drang nach der Erzählung, nach der Sage, nach dem Erzählen überhaupt, später nach dem Geschichtlichen (49)

\* wohl ist das Wesen des Menschen an sich gut und wohl gibt es in dem Menschen an sich gut Eigenschaften und Bestrebungen (51)

\* Der Mensch als irdische Erscheinung, als Erdenwesen ist bestimmt, daß Geist und Körper, Leib und Seele in einem gewissen Ebenmaße, Gleichgewichte mit Bewußtsein und Vernunft ausgebildet werde ... der Mensch will lieber das Rechte als das Schlechte (52)

\* Es ist gewiß eine sehr tiefe Wahrheit, deren Nichtanerkennung sich leider täglich schwer rächt, daß es am meisten der Mensch, der Andere Mensch, oft selbst der erziehende Mensch selbst es ist, welcher den Menschen, das Kind und den Knaben erst schlecht macht (53)

\* ein tiefer, ahnender, sehnender Sinn in des Knaben Gemüte durch alles hindurch, was er in diesem Zeitraume tut, durch alles ein tiefer bedeutungsvoller Sinn (55)

IV Der Mensch als Schüler: (56-103)

1. Was ist Schule? (56-)
2. Was sollen Schulen lehren? (58-)
3. Über die Hauptgruppen des Unterrichts. (60-85)



Töne, die die Amphibien hervorbringen (418) Töne, die die leblose Nature hervorbringt (418-424)	gends ein Hinderniß, nirgends eine Schranke! (213)	A. Über Religion und Religions = Unterricht (60-) B. Über Naturkunde und Mathematik (62-)
C. Über Sprache und Sprachunterricht und das damit zusammenhängende Lesen und schreiben (77-) D. Über Kunst und Kunstgegenstände (84-) 4. Über den Zusammenhang zwischen Schule und Familie und die dadurch bedingten Unterrichtsgegenstände (86-103) A. Allgemeine Betrachtung (86-) B. Besondere Betrachtung der einzelnen Unterrichts = Gegenstände. (88-103) a. Belebung und Ausbildung des religiösen Sinnes. (88-) Aneignung religiöser Außprüche. (89-) b. Achtung, Kenntniß und Ausbildung des Körpers (90-) c. Natur = und Außenwelts = Betrachtung (91-) d. Aneignung kleiner dichterischer, Natur und Leben erfassender Darstellungen, besonders zum Singen und für den Gesang (92-) e. Sprachübungen, von der Natur = und Außenweltsbetrachtung ausgehend (93-) f. Übung zu und für äußerlich, körperlich räumliche Darstellungen nach Regel und Gesetz, vom Einfachen zum Zusammengesetzten fortschreitend (94-) g. Zeichnen im Netz nach äußerlich nothwendigem Gesetze. (95-) h. Auffassen der Farben in ihrer Verschiedenheit und Gleichartigkeit, besonders durch Darstellung der selben in schon gebildeten Flächenräumen, mit vorwaltender Beachtung schon gebildeter Formen: Ausmalen von Bildern in Umrissen; später, mit vorwaltender Beachtung der Farben: Malen im Netz (96-) i. Das Spielen, das ist freithätige Darstellungen und Übungen jeder Art. (96-) k. Erzählungen von Geschichten und Sagen von Fabeln und Märchen, anknüpfend an die Tages =, Zeiten = und Lebensbegegnisse. (97-) l. Kleine Reisen und größere Spaziegänge (98-) m. Zahlenkunde (99-) n. Formenkunde (100-) o. Sprechübungen (101-) p. Schreiben (102-) q. Lesen (103-) r. Überblick und Schluß des Ganzen. (104)		